

令和 5 年 6 月 21 日現在

機関番号：35315

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K02590

研究課題名（和文）放課後児童支援員と作業療法士の協業が発達障害をもつ児童のQOLに及ぼす効果

研究課題名（英文）The effects of an collaboration between occupational therapists and after-school childcare staffs on quality of life

研究代表者

小林 隆司（Kobayashi, Ryuji）

岡山医療専門職大学・健康科学部 作業療法学科・教授

研究者番号：70337989

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：埼玉県の学童保育5施設で30人の児童に対する比較試験を実施した。コントロール群（n=15）は通常のケアを、介入群（n=15）は通常のケアに加えてスタッフに対する作業療法士とのオンラインミーティングを3回実施した。介入の効果は「子どもの強さと困難さのアンケート（SDQ）」のスコアを用いて計量した。SDQスコアの前後差の平均を2群で比較した。その結果、統計的に有意な差を行為の問題（ $p=0.023$ ）と向社会的な行動（ $p=0.038$ ）に認め、介入群の方がポジティブな値だった。作業療法士と学童保育支援員との協業の効果はまずは児童の行動面にあらわれることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

作業療法士と学童保育支援員との短期間の協業が発達障害のある児童の行為の問題に有効であることが示された。このような児童の通いの場におけるリハビリテーション従事者の介入効果について比較試験をおこなった例は今までなかった。

本研究の成果は、小学校や児童デイサービスにおいても適応可能で、それらの場所のスタッフと作業療法士等との協業に波及することで、発達障害をもつ児童とその家族が安心して暮らせ、自分の能力を発揮し、活躍できる優しい社会の創造に大きく貢献できると考える。

研究成果の概要（英文）：A controlled clinical trial was conducted on 30 children from five programs in Saitama Prefecture, Japan. The control group ($n = 15$) received the usual care and the intervention group ($n = 15$) received OT online consultation thrice for the staff. The efficacy of the interventions was measured using the total and subscore of the Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ) that was examined by the program staff.

We calculated the difference in SDQ scores before and after intervention and compared the means between the two groups. We found a significant improvement in the conduct problem score ($p = 0.023$, effect size, $r = 0.413$) and prosocial behavior score ($p = 0.038$, $r = 0.376$). No significant differences were observed in the emotional symptoms, hyperactivity/inattention, peer relationship problems, and the total difficulties score.

The OT consultation in the after-school childcare program was effective in improving the behavioral problems of children with developmental disorders.

研究分野：地域総合作業療法

キーワード：放課後児童クラブ 専門職連携 作業療法

1. 研究開始当初の背景

【背景】

放課後児童クラブは、保護者が労働等によって家庭にいない放課後や学校休業日の昼間の時間に、学齢期の子どもを対象におこなわれる養護と教育の一体的な提供である。放課後児童クラブにおいて、児童の養護と教育に携わる職員を放課後児童支援員（以下、支援員）という。

全国学童保育連絡協議会（学童保育情報 2017-2018）によると、障害をもつ児童の学童保育への受入数は、2003年から2012年の10年弱で、7,200人から22,570人と、約3倍の増加を示し、障害をもつ児童の受入に対して現場の体制が追い付いていないとされている。

たとえば、我々の実施したアンケートでは、多くの施設の支援員が、実際の現場で直接、発達障害をもつ児童一人ひとりに対する「具体的な対応の仕方」に関して専門職と相談する機会を要望し、回答施設の実に96%においてそのような協業の実績がなかった（小林ら：作業療法 36:109-112, 2017）。

【課題】

そこで応募者らは、「発達障害のリハビリテーションに関わる専門職である作業療法士と支援員との協業が有効ではないか？」と考えた。その理由は、リハビリテーション専門職の中でも特に、日常生活や遊び、役割ができるように生活を再設計することの多い作業療法士（小林ら：学童期の作業療法, 2017）は、毎日の生活の場（学童保育情報 2017-2018）である放課後児童クラブにおいてより効果的な提案ができ、児童の生活の質の向上に寄与するものと考えたからである。しかしこれまで、放課後児童クラブにおける作業療法士と支援員の協業の方法論は明確になっていないし、その有効性も検証されていない。

2. 研究の目的

【目的】

本研究の目的は、放課後児童クラブにおける、作業療法士と支援員の協業の効果を、ランダム化比較試験を用いて明らかにすることである。

【学術的意義】

作業療法士が放課後児童クラブに参入した例は我々のもの（小林ら：学童保育に作業療法士がやって来た, 2017）を除くとほとんどない。その要因としてまず、小児作業療法は、これまで病院を中心にその実践が行われており、地域や学校現場で一般市民が作業療法士に接する機会は少なく、支援員が作業療法士の存在を知らないという現状がある（小林ら：作業療法 36:109-112, 2017）。一方、作業療法士も、放課後児童クラブに発達障害を持つ児童がいることを知る人は少ない。しかし、地域包括ケアシステムの構築が急がれる昨今、作業療法士の参入が児童の様々な生活場面でも求められており、有効な協業の方法の確立と効果の検証が求められている。

【社会的意義】

全国学童保育連絡協議会の調査では、利用児童の小学校にいる時間（年間1218時間）よりも放課後児童クラブですごす時間（年間1633時間）の方が長いとされる。そのため本研究の成果は、小学校や児童デイサービスにおいても適応可能で、それらの場所のスタッフと作業療法士等との協業に波及することで、発達障害をもつ児童とその家族が安心して暮らせ、自分の能力を発揮し、活躍できる優しい社会の創造に大きく貢献できると考える。

3. 研究の方法

【研究1】

(1)目的

比較群を設定しない介入研究の実施とサンプルサイズ等の決定を目的とした。

(2)対象

岡山県内の放課後児童クラブ5ヶ所程度に依頼をして、1ヶ所5人（合計25人）程度、発達障害をもち支援が必要な児童を選んでいただいた。文書で保護者及び本人から同意が得られた場合に支援対象児童とした。実際の支援対象としてエントリーされた児童は20人となった。

(3)介入方法

作業療法士と協業する支援員は各放課後児童クラブ1名とした。放課後児童クラブでの協業の実績のある作業療法士5名を雇用して、1人1施設を担当していただいた。この作業療法士に、1回2時間の現場での協業を2週に1回、3カ月程度おこなっていただいた。協業の方法は生活行為向上マネジメントのプロセスに準じて行うが、作業療法士は直接児童の支援には参加せず、現場の観察と支援員との相談を専らとした。

(4)成果指標

メインの成果指標を「小学生版QOL尺度」とした。また、副次的な成果指標として、「児童の

強さと困難さアンケート」と「EQS 情動知能スケール」を用いた。これらは、当該児童の行動や情緒の問題、非認知的スキルについて評価するもので、支援員に回答を求めた。

【研究 2】

(1)目的

ランダム化比較研究によって、作業療法士と支援員の協業の効果を検証する事。

(2)対象

埼玉県内の放課後児童クラブ 6カ所に依頼をして、1ヶ所 6人(合計 36人)、発達障害をもち支援が必要な児童を選んでいただいた。文書で保護者及び本人から同意が得られた場合に支援対象児童とした。介入群 18人、対照群 18人とした。

(3)介入方法

作業療法士と協業する支援員は各放課後児童クラブ 1名とした。放課後児童クラブでの協業の実績のある作業療法士 2名を雇用して、介入を担当していただいた。新型コロナウイルス感染症の流行により、オンラインでの介入とした。この作業療法士に、1回 2時間の協業を 2週に 1回、合計 3回おこなっていただいた。介入は支援員との相談のみとした。対照群の児童には、介入期間終了後に 3回のフォローアップのオンラインミーティングをおこなった。

(4)成果指標

メインの成果指標を研究 1の結果から「児童の強さと困難さアンケート」とし、支援員に回答を求めた。

4. 研究成果

【研究 1】

(1)研究の主な成果

比較研究のサンプルサイズは 30人が適当との結果を得た、また、成果指標については、有意な差をもたらすものはなかったが、「児童の強さと困難さアンケート」が一番センシティブであり、研究 2で使用できると考えた。本研究を通じて得られた、事前情報や実施記録等の質的データから放課後児童クラブでよくみられる児童の問題点と対処法について公表した。表 1 に問題点のみ示す。

表 1 放課後児童クラブでよくみられる児童の問題点と対処法

よく見られる課題	
項目	具体例
衝動的で、すぐに暴言・暴力に至る 他人への配慮に欠ける	・思い通りにいかなかったり、ダメ!などの禁止をされると「死ね」などの言葉と一緒に蹴る、叩く、つめるなどする。 ・他の子は遊ぶために机を使いたくておもちゃを置いているが、わざわざそのおもちゃを落としてまで台ふきをしようとして、自分勝手な行動をしているように見られている。
片付けられない	・自分の持ち物などの管理、片付けができない。
忘れ物が多い	・いろいろなものを学校に忘れてきて、しょっちゅう取りにいつている。
じっとしてられない	・様々なものが気になり、学習やおやつの時間に、座り続けることが難しい。 ・奇声をあげて飛び跳ねている
切り替えが苦手で、変化に弱い	・遊びに夢中になるとなかなかやめられず、集合時間や早めに声をかけてもやりたいことがなかなかやめられない。 ・初めての場所、出来事には戸惑う様子があるため、補助が必要。
友達と仲良く遊べない	・同級生の友達との遊びについていけない ・ブロックが好きでよく遊んでいるが、自分の部品を盗られたと一方的に怒ったり泣いたりする。
学習についていけない	・本人が勉強面その他で出来ないことがわかってきていて、自信をもてない様子なのが気になる
人的環境に問題がある	・担任が変わって、ストレスがあるようだ ・家族の対応(暴力・ネグレクト)に苦慮している

(2)得られた成果の国内外における位置づけとインパクト、今後の展望

本研究により、ランダム化比較試験の準備が整った。よくみられる児童の問題点と対処法について公表することによって、本領域での作業療法士の教育と参入促進につながり、敷いては児童の生活の質の向上につながると考えられる。

【研究 2】

(1)研究の主な成果

1施設からの結果が対照群のフォローアップ期間後に送付されたので、解析から外した。その

ため解析データは介入群 15 名、対照群 15 名となった。統計の結果、介入により、行為の問題と向社会性にポジティブな効果が認められた (表 2)。

表 2 作業療法士と放課後児童支援員との協業の効果

outcome measure	means score change from baseline to postintervention		p-value
	online consultation group	standard care group	
	mean (95% CI)	mean (95% CI)	
SDQ Total Difficulties Score	2.67 (0.64, 4.69)	1.2 (-0.6, 3.00)	0.256
Emotional Symptoms	0.33 (-0.77, 1.43)	-0.47 (-1.09, 0.16)	0.233
Conduct Problem	1.4 (0.59, 2.21)	-0.07 (-1.10, 0.97)	0.024*
Hyperactivity / inattention	0.33 (-0.38, 1.05)	1.33 (0.12, 2.55)	0.142
Peer Problems	0.6 (-0.28, 1.48)	0.4 (-0.22, 1.02)	0.694
Prosocial Behaviour	-1.33 (-2.49, -0.17)	-0.07 (-0.78, 0.64)	0.038*

*P<0.05

(2)得られた成果の国内外における位置づけとインパクト、今後の展望

本研究により、作業療法士と学童保育支援員が、3回という短期間の協業でも、児童の行為の問題に改善効果があることがわかった。

(3)当初予期していない事象が起きたことにより得られた新たな知見

コロナ禍により、研究2のフィールドを埼玉県に、協業の方法をオンラインでのミーティングに変更した。その結果、オンラインかつ遠方でも一定の効果があることがわかった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 R. Kobayashi
2. 発表標題 Needs for consultation with occupational therapists at after-school childcare program
3. 学会等名 16th World congress of International Society of Physical Rehabilitation Medicine (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 R. Kobayashi
2. 発表標題 Relationship between non-cognitive ability and quality of life in children with developmental disorder
3. 学会等名 2nd COTEC-ENOTHE 2021 CONGRESS (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 R Kobayashi
2. 発表標題 Effects of an Occupational Therapy Online Consultation in After-School Childcare Program
3. 学会等名 15th Mederranian congress of physical and rehabilitation medicine (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 小林隆司	4. 発行年 2023年
2. 出版社 医歯薬出版	5. 総ページ数 -
3. 書名 子どもの地域作業療法 in 「地域作業療法学」	

1. 著者名 小林隆司 監修	4. 発行年 2021年
2. 出版社 クリエイツかもがわ	5. 総ページ数 155
3. 書名 「学童保育×作業療法」コンサルテーション入門	

〔産業財産権〕

〔その他〕

researchmap https://researchmap.jp/ot-kobayashi
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	石橋 裕 (Ishibashi Yu) (50458585)	東京都立大学・人間健康科学研究科・准教授 (22604)	
研究分担者	伊藤 祐子 (Ito Yuko) (60289973)	東京都立大学・人間健康科学研究科・教授 (22604)	
研究分担者	野口 泰子 (Yasuko Noguchi) (50912705)	岡山医療専門職大学・健康科学部 作業療法学科・助教 (35315)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------